

# 四国 88 ヶ所・お遍路に関する調査研究 ～文化遺産として後世に残すために必要な機能とは～

1080449 越智 淳 By Atsushi Ochi

指導教員：草柳俊二教授

高知工科大学 工学部 社会システム工学科 建設マネジメント研究室

四国には四国 88 ヶ所の寺院を巡るお遍路という文化遺産が存在している。約 1,200 年前に弘法大師が人々の災難を除くためや人々の心の悟りの場として開いた霊場とされ、衛門三郎が自分の非を悟り、弘法大師の後を追って四国を巡った事が始めとされている。現在では年間約 150,000～200,000 人もの人々がお遍路を行っている。理由は自己を見つめる、身内の供養、観光等様々である。本研究は実際に四国 88 ヶ所を巡拝しながら、お遍路の実態を把握し、この文化遺産を後世に残すためには、遍路道にどのような機能の充実が必要なのかを見出すものである。

*Key Word: Ohenro Michi, World Heritage, Cultural Properties Protection*

## 1. 序論

### (1) 背景

四国 88 ヶ所を 1 番札所霊山寺から 88 番札所大窪寺まで、通し打ちと呼ばれる基本のルートで巡ると約 1,300～1,400 km の長い道のりとなる。年間約 150,000～200,000 人の人がお遍路となって四国を巡っている。お遍路は四国にとって大切な観光資源でもある。巡礼の方法はバス、バイク、自転車、そして徒歩である。そのうち徒歩での巡拝は年間約 6,000 人であり、個人差はあるが結願には約 40～60 日が必要となる。巡礼者たちは安全にお遍路ができているのであるか。書店で販売している書籍では巡拝用品の説明や各札所の説明、巡拝用語の説明等が記載されているが、安全に巡拝するための道は詳しく記載されていない。また、天候不良や道路の規制等により通行不可の場合の迂回路も記載されていない。

### (2) 本研究の方針

- ・ 四国 88 ヶ所とお遍路に関する情報収集
- ・ お遍路の現地調査と現状把握
- ・ 現地調査の結果で見出された問題点と解決策
- ・ アンケート調査と分析
- ・ 後世に残る文化遺産として必要な機能の提案

## 2. 目的

実際に四国 88 ヶ所を巡拝し、四国 4 県の道路の整備状況や案内標識の設置状況がどのような状況かを調査し、その現状把握を行う。また、お遍路に対する意識調査のアンケートを行い、お遍路について四国 4 県内の人々の意識を把握する。お遍路が安全に巡拝できるための道路整備や、迷わず巡拝するために必要な機能の調査研究、文化遺産として後世に残すためには、また観光資源として整備するためにはどのような機能が必要なのかを見出す。

## 3. お遍路の現地調査

### (1) 調査概要

四国 88 ヶ所お遍路の道路・案内標識の現状を把握するために、実際に四国 88 ヶ所を巡拝した。以下は

現地調査の概要である。

調査目的：道路・案内標識の現状把握

巡拝期間：2007/08/12/日～14/火

2007/08/18/土～19/日

2007/08/22/水～24/金

2007/08/27/月～31/金

2007/09/01/土 計 14 日間

巡拝手段：バイク（スーパーカブ 75cc）

移動距離：約 3,000km

巡拝順路：区切り打ち（地域に分けて巡礼）

### (2) 調査結果

#### (2-1) 道路の現状

各県の主要な国道・県道ではアスファルト舗装がされており、歩道も整備されていた。しかし、山中にある道路ではガードレールや街路灯もなく、舗装にひび割れがあり、離合できない状況であった。



写真 1-1. 県道 57 号線 41 番札所付近

写真 1-1. に示すように県道 57 号線等の幹線道路では車線と共に、十分な幅の歩道が設けられている。



写真 1-2. 県道 43 号線 12 番札所付近

しかし、写真 1-2. に示すように同じ県道でも歩道がなく、自動車の行き違いも難しい状況の道路も多

くあった。また街路灯がないため、夜間の移動は危険である。調査はバイクでの走行であったが、道路にひび割れや落ち葉が散乱し、カーブミラーもないため対向車の確認が困難であった。これではお遍路の身の安全が確保されない状況の上、いつ事故が起こってもおかしくない。国道や県道ではなく、60番札所横峰寺の途中の私道ではアスファルト舗装ではなく、コンクリートでの舗装となっている。コンクリート舗装の表面はツルツルしており、つぎはぎや轍が多く見られ、天候不良時にスリップの恐れや危険が予想される箇所が多々あった。

### (2-2) 案内標識の現状

調査した結果、遍路道には統一された案内標識がないことが分かった。札所と札所の連携がとれていない事が原因と考えられる。各札所がそれぞれに案内標識を設置しているだけである。国道や県道では大まかな標識は存在する(写真1-1)が、詳細な案内標識はなかった。



写真2-1. 県道20号線 60番札所付近

写真2-1.の中央に案内標識が見られるが、この標識は近くまで行かないと書かれている文字を見ることができず、分かり辛い。60番札所横峰寺に行くには右のわき道を通る。しかし、案内標識がわかり辛いので、通るべき道を行き過ぎ、Uターンをしている自動車が多い。標識は道に迷わないように案内する役目があるが、この標識は本来の標識の役目を果たせていない。



写真2-2. 分かりづらい案内標識の例

写真2-2.左の案内標識は手前に木があるため文字が見えない。右の案内標識は手作りで、文字が消えている。他にも道路の脇に置かれているものや、カーブミラーや電信柱にシールを貼っているもの、小さい案内標識が多く見られた。



写真2-3. 様々な案内標識の例

写真2-3.案内標識の例として3つの案内標識を挙げる。各県の環境庁が設置した案内標識や右の写真のような道路に大きく文字を書いた案内表示もあれば、各札所やNPO法人等様々な団体がそれぞれに設置した標識と、多種多様である。四国88ヶ所をまとめる組織がないため、案内標識が不揃いであると言える。

### (3) 現地調査により分かった問題点

幹線国道や県道では歩道の設置やアスファルト舗装がされている。しかし、山中の県道や私道は歩道がなく、舗装も整備されていない道路が多くあった。また、案内標識は統一されておらず、本来の機能を果たしていない案内標識も多く見られた。ある巡礼者は「標識があるが、順打ちでは分かるけれど、逆打ちでは順路が分からない」との意見を述べていた。

札所間の最も長いのは高知県内の37番札所岩本寺～38番札所金剛福寺は約95kmもあり、徒歩で3～4日かかる。しかし、途中で休憩所や宿泊施設がほとんどなく、徒歩での巡礼者にとっては大変厳しい道のりとなっている。徒歩だけでなく自動車やバイクを利用するにしても休日や祝日、夜間ではガソリンスタンドが開いていないという状況である。

このように、道路幅員や路面、歩道の確保、案内標識、休憩所等の整備が不十分なため巡礼者の安全確保に問題があることが分かった。

## 4. お遍路に対する意識調査

### (1) 調査概要

四国各県の人々にお遍路に対する意識を把握するためにアンケート調査を行った。対象は巡礼者と否巡礼者の2区分とした。否巡礼者に対しは、お遍路に対しどんなイメージを持っているのか、“お接待”についての知識の有無等を知るためにアンケートを行った。アンケートは各県の中央公園にてインタビュー方式で行った。

調査目的:お遍路に対する意識調査の把握

内容:主にお遍路に興味を持っているか、お遍路についての知識を持っているのか

対象者:属性の制限無し 各県25名 計100名  
(100枚配布 回収率100%)

調査時期:2007/12/06/木

2008/01/19/土

調査場所:四国各県の中央公園周辺

## (2) 調査結果

図1-1.は各県の年代別回答者の割合のグラフである。回答者は10代5名、20代30名、30代12名、40代13名、50代13名、60代は27名。男性50名、女性50名の計100名であった。

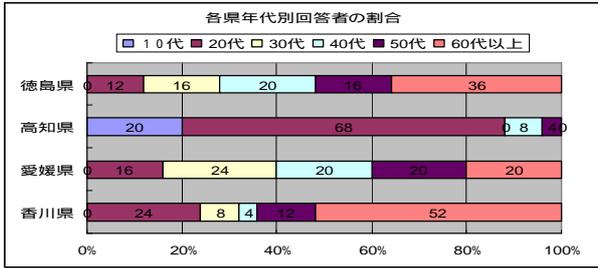


図1-1.各県年代別回答者の割合

表1-1.は各県の年代別お遍路経験者の割合である。各県の10～30代ではほとんどお遍路の経験がないことが分かる。逆に、40～60代以上では10～30代よりも割合が増加し、お遍路の経験者が多いことが分かる。また、香川県と徳島県において50～60代以上の方はお遍路の経験者が多く、特に香川県の60代以上の方はお遍路の経験者が群を抜いて多い。

香川県は弘法大師の誕生の地であり、お遍路の基点ともいえる88番札所の大窪寺があり、他県よりもお遍路に対する意識が高いと考えられる。次いで経験者の多い県は「発心の道場」と呼ばれる、1番札所霊山寺のある徳島県である。香川県や徳島県と比べると愛媛県や高知県では経験者は少なく、特に高知県は最も経験者の少ない結果となった。

	10代	20代	30代	40代	50代	60代以上
香川県	0	0	0	4	8	40
愛媛県	0	4	0	8	8	8
高知県	0	0	0	4	4	0
徳島県	0	0	0	8	12	16

(%)

表1-1.各県年代別お遍路経験者の割合

図1-2.は県別の今後お遍路をしたいかの有無のアンケート結果である。最も多くお遍路をしたいと答えたのは徳島県であり、最も少なくお遍路をしたいと答えたのは高知県である。高知県ではお遍路をしたいと答えた方は過半数を下回り、他県に比較すると極端に少ない結果となった。高知県では室戸岬から足摺岬にある札所間の距離や休憩所の有無、札所の数や札所間の距離といった物理的条件の厳しさもあると思われる。

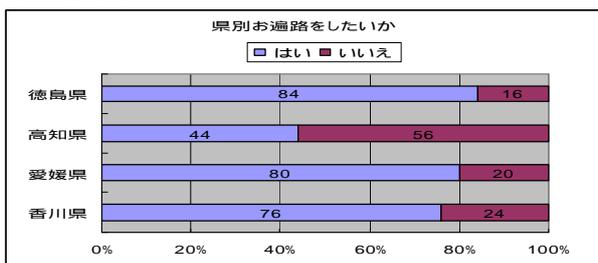


図1-2.県別今後お遍路をしたいかの有無

図1-3.は各県でのお接待に対する意識をアンケート結果である「したい」「どちらでもない」「したくない」の3通りで答えてもらった。最も多く「したい」と答えたのが愛媛県であり、最も多く「したくない」と答えたのが高知県である。高知県はお遍路に対するお接待の意識が低い結果となった。

最も多くお接待をしたいと答えた愛媛県では「お遍路に行くには時間や金銭的な制約が生じるため、お遍路に行きたくても行けない。その為、自分の代わりとなるものをお遍路に手渡し、一緒にお遍路をしてもらっている」という意見もあった。

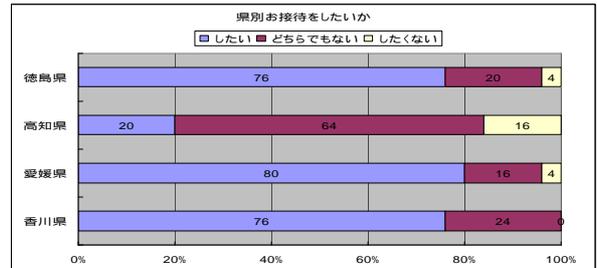


図1-3.県別お接待をしたいか

## (3) アンケート調査まとめ

アンケート調査の結果では、高知県は他の3県よりもお遍路の経験者数が少なくなっているのは10～20代の占める割合が多いためと考えられる。しかし、高知県は他の3県よりも小学校や中学校でお遍路に関する事を学んだことのあると答えた方が最も多く、中には「遠足で札所に行ったことがある」という意見もあった。いずれにしても、再度、高知県での高齢者へのアンケートを行う必要がある。

全体的には、年齢が上がると共にお遍路の経験者は増加し、またお遍路をしたいと答えた方も増加した。日本には四季がある。2度3度とお遍路をまたしたいという方の中には春・夏・秋・冬と季節が変わることによって以前巡拝したときと風景が異なり、目で見るという楽しみが増える。春には椿、桜、ツツジが咲き、蓮華や菜の花が田畑を彩る。秋は山々が紅葉となる。

必要だと思う施設として、巡礼者の家族が安否を確認できる場所(連絡上)の確保や、札所間の長い道沿いに休憩場の設置をしてほしいという意見があった。他には多くの女性巡礼者が、道路沿いに道の駅ができたのでトイレ休憩がしやすくなったという意見を述べた。

## 5. 文化遺産として後世に残す為に必要な方策

### (1) 必要な機能の充実

3.お遍路の現地調査で説明したように山中の道路の幅員は狭く、事故の生じる危険性が高い状況である。お遍路の身の安全を確保する為整備の必要性がある。また、道に迷わないための案内標識を設置する。案内標識としての役目を果たしていない標識があり、環境庁や他の団体、個人個人がそれぞれに設

置している案内標識は統一されていないため、案内標識見やすくするためデザインの見直しや統一の必要性がある。

### (2) 文化遺産としての付加価値を高める

遍路道は歴史と共に位置を変化させてきた。現在の遍路道の整備と共に、歴史的遍路道を明らかにし、整備してゆく必要がある。そのために明治時代や江戸時代、さらに昔に設置された道標や丁石、観音菩薩像の所在地、形状、銘文等を調査して行く活動が必要である。

### (3) 若者による遍路文化支援組織の設立

お遍路・四国 88 ヶ所を文化遺産として確立していくためには 4 県が一体となった統括組織が必要である。四国県内の各札所付近の小学校や中学校、高等学校、大学が連携しあい、児童や学生がメインとなってお遍路、四国 88 ヶ所を文化遺産として後世に残す動きが必要である。そのため文化遺産として後世に残すためには若者の協力が必要不可欠である。

#### (3-1) 遍路文化を支える学校における組織の構築

図 2. 組織図はお遍路・四国 88 ヶ所を統括した組織の下に各県の大学、高専、高等学校、中学校、小学校が連携したものである。また、組織の構図は大学から小学校の縦の繋がりでなく、四国 4 県の横の繋がりで図ったものである。

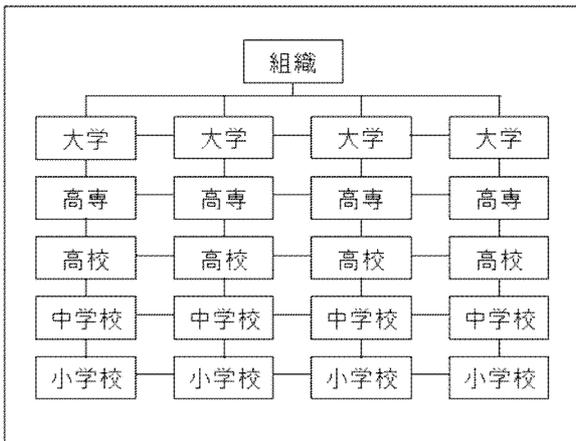


図 2. 組織図

#### (3-2) 四国 4 県の学校をまとめる方策と活動内容

いかに四国 4 県の学校をまとめるかということが重要となる。また、アンケート調査より香川県と徳島県はお遍路に対する意識が高いことが分かったが、意識の低い愛媛県と高知県のお遍路に対する意識の向上が必要である。高知県では小学校や中学校でお遍路に関することを学んだ学生が多かった。他の県でも小学生や中学生時にお遍路に関することを学ぶ機会を設けなければいけない。

現在、高知県には「高知県建設系教育協議会」という組織が設立されており、高等学校、高専、大学の連携組活動が活発に行われている。この活動形態が四国四県に設立し、各大学に「お遍路クラブ」設立する。次に、高等学校、中学校、小学校の参加だが、各札所に近い学校に参加してもらうことにする。

この大学のクラブを中心に、各学校に呼びかけ、組織の活動を行う。大学の代表は 2 年または 3 年程度で交代させ、ローテーションとする。主な活動内容として、札所間の道路の清掃、お遍路・四国 88 ヶ所の歴史の学習、統一した案内標識の作成等とする。

#### (4) 世界遺産登録に関すること

2000 年に四国 88 ヶ所、お遍路を世界遺産に認定させようとする団体がある。その事について他団体ではあるが某 NPO 法人に面談した。この組織はお遍路が道に迷わないために矢印や×印のステッカーを作成している。飲料水メーカーと提携し、ステッカーを自動販売機に貼り、お遍路の道しるべとしている。他にも休憩所の設置、携帯メーカーやコンビニエンスストア等と提携し、休憩、トイレ、道案内、インターネット利用、携帯電話の充電といったお接待が受けられるシステムを構築している。

数年前、「熊野古道」が世界自然遺産として、国連教育科学文化機関（ユネスコ）に登録された。しかし、文化遺産となった「熊野古道」には様々な問題が発生している。ペンキによる木や石に落書き問題や訪問者・観光客の増加によって、熊野古道が観光資源化し、乱開発によって生じる価値の損失、ゴミ問題等様々な問題である。お遍路の世界遺産登録への動きは、まず、四国 4 県民が共通の認識を持って自分たちの文化遺産として後世に残して行く考えが必要である。

## 6. 結論

お遍路、四国 88 ヶ所は長い歴史を持ち、文化遺産として後世に残すことは日本人として誇らしいことである。しかし、お遍路・四国 88 ヶ所は、まだ文化遺産として十分に認知されるものとなっていない。まずは、四国 88 ヶ所を統括する組織を設けることが重要となる。そして、道路の整備、案内標識の見直し、四国県内の学校の連携により、若者の協力、意識改革を図ることが大切である。

熊野古道のような問題が生じる前の対策が重要であり、若者だけでなく、周辺住民の協力を得ることも重要となる。人々の協力によって後世に残すために必要な機能を構築しなければならない。

～参考文献～

1. 四国遍路完全ガイド  
まるごと早わかり 四国八十八ヶ所巡拝  
発行 株式会社双葉社  
著者 石川達司
2. 改訂版 四国八十八ヶ寺&周辺ガイド  
発行 株式会社出版文化社  
発行人 浅田厚志
3. 世界遺産 熊野古道伊勢路  
<http://www.pref.mie.jp/KODO/index2.htm>